

イースター、それはイエス・キリストの復活を祝う日です。旧約の時代、礼拝は週の終わり（土曜日）に行われ、感謝と喜びを預けにくる日でしたが、次にやってくる不安がありました。十字架の死の3日後、イエス・キリストが復活した朝、それが日曜日の朝であり、このときから、週の始めが日曜日となりました。（I コリント 2:7~9）ここにあるとおり、この世の支配者つまりこの当時の支配者であるユダヤ人たちが、イエス・キリストを十字架に架けました。この十字架はある人にとっては非常な悲しみであり、ある人にとっては邪魔者を殺した喜びでした。このイエス・キリストの十字架から復活の背景には様々な人々のドラマがありました。（1）二人の囚人（ルカ23:39~43）・・・イエス・キリストが十字架に架かったとき、二人の囚人が左右にいました。一人は「お前が神の子なら自分と俺たちを救ってみろ」となってしまう。もう一人は、「自分たちは罪を犯した。でもこの人は違う。主よ、御国に入ったときに思い返してください」と言いました。同じ罪を犯した者であっても、最後の最後で、ここまで差があるのです。この時、イエス・キリストは後者の人に「あなたは私と一緒にすでにパラダイスにいる」と言い、彼は救われ、一方はカラスに目をつつかれ見えなくなっていました。（2）マリヤ（ヨハネ20:11~18）・・・イエス・キリストがなくなってマリヤは絶望の中にいました。3日目の朝、墓に行ったとき、亡骸さえもなくなり、悲しんでいる彼女の元へ、天使がやってき、イエス・キリストが復活したことを告げます。そしてその後、天使が事をなしたにも関わらず、彼女の前に、直接イエス・キリストが現れ、弟子たちの元へ知らせに行くよう告げました。

（3）トマス（ヨハネ20:24~29）・・・12弟子の中で、彼はイエス・キリストの復活について不信仰でした。イエスに会ったという、他の弟子たちの言葉を信じず「イエス・キリストの手に釘の跡をみて、自分の指を刺し通し、脇に手を差し入れないと決して信じない。」と言いました。そんな彼の元に、イエス・キリストは現れ、トマスは、そこで信じるのです。このように神様はいつも一人に対して、事をなします。「99匹の羊を置いてでも1匹の迷える羊のために」聖書の出来事はいつも神対個人なのです。（4）二人の弟子（ルカ24:13~31）・・・イエスの復活について話をしながら、エマオに向かう二人の弟子のもとに、イエス・キリストは現れました。しかし、その弟子たちは、道中とだけ一緒に話をしてもイエス・キリストだと気づかず、最後共に食事をし、パンを裂いて渡されて、初めてイエスだと気づきました。「彼は死んだ。居るわけがない」という固定概念のために、気づけなかったのです。固定概念とはこのようなものです。「そんなわけはない」こう決めると、見えなくなってしまうのです。私たちの頭もそうです。だからこそ私たちが当たり前だと思っていることも本当にそうなのか考えなくてはなりません。（4）ユダ・・・裏切り者として知られるユダも、イエス・キリストを愛していました。愛しているゆえ、イエス・キリストを売るようなまねをし、自らを責め最後は死を選んでしまいました。彼にも悔い改めるチャンスはあったはずですが、しかし、悔い改めなかったのです。私たちにも「こうしたほうがいい」と語られていることがあります。しかしそれをあまりにも破り続けるとユダようになってしまいます。（4）ペテロ（ヨハネ21:15~）ペテロは、3度、イエス・キリストは知らないと言ひ、逃げたものの、イエス・キリストが彼の前に現れ、3度、『私を愛するか？』と問いかけられたときに、「愛します」と言い、もう一度、イエス・キリストの弟子として仕えました。これらの人々の姿を通して私たちは、学び、すべきことがあります。①心を開く。登場人物の中で、心を開けなかった人々が、失敗してしまいました。人間のことを思い、神の思いがわからなかったのです。つまり、自我がダメにしたのです。だから心を開きましょう。あなたのこれまでの常識・価値観で心を閉ざしたままにしないでください。②思いを伝える。イエス・キリストが十字架にかかったのは、私たちの思いを聞くためです。あなたの全ての思い、過去の苦しみなど背負うために十字架に架かってくださったのです。もしこれを知っていてあなたの心の中にある思いをとどめているのなら、イエス・キリストの死は、ムダ死になってしまいます。「幸せになりたい」「こんなことが辛い」「こんなふうになりたい」などあなたの素直な思いを伝えてください。ただし、最後までイエス・キリストをのしただけの囚人ようにはならないでください。なぜなら神様はあなたを愛しているからです。愛している人に冷たい言葉をかけられたら悲しいものです。あなたの素直な思いを伝えてください。③失敗しても十字架の元へ。ユダは失敗の後、十字架の元に戻らず、自分を責め、自ら命を絶ってしまいました。聖書は失敗を責めようとしているわけではありません。あなたや先祖が犯した過去の失敗、罪があなたを呪うなんてことはありません。あなたにも過去に辛かったことはたくさんあるでしょう。それを忘れろとはいっていません。そしてこれからも失敗はあるかもしれませんが、だからこそ、イエス・キリストはあなたの代わりに神の前に悔い改めるために十字架に架かったのです。ペテロの例えのように、失敗しても、悔い改めるものには、神様はチャンスを与えてくれます。私たちは、ただ見ようとし、心を開き、口を開けばよいのです。自分に言い訳をせず、そこから逃げず、素直に神の前に出ればよいのです。イエス・キリストが十字架を背負っていく途中、シモンというクレネ人が登場します。彼は、祭りに出るために、息子たちと偶然町へ出てきていました。そこで兵隊にイエス・キリストの十字架を共に背負って歩けといわれ、躊躇せず、共に背負って歩いたのです。私たちクリスチャンは、自分の重荷を背負ってもらい自分だけが幸せになるだけでなく、彼のように、イエス・キリストの十字架を共に背負うべきなのです。それは誰かのために、その人の痛みの一部でも負って共に祈ればよいのです。（ピリピ2:1~2:8）イエス・キリストはあなたの全ての思い煩い、一切の思いを身に引き受けて十字架にかかりました。今日こそ、是非、イエス様に語りかけ、御元に帰りその恵みを受け取りましょう。